

讃美歌「アメイジング・グレイス」と 奴隷貿易

鈴木 雅之

イギリス文学史上、18世紀半ばから後半にかけて、前ロマン主義時代と称される頃に活躍した詩人たちは、しばしば、「信仰的目覚め」を意味する「回心」(conversion)という激しい宗教的感情を経験した。それは、この時代に広まった宗教というよりはひとつの運動とも呼ぶべき「福音主義」(evangelicalism)の特徴である。ウィリアム・クーパー (William Cowper, 1731-1800) 等と共に、福音主義を代表する詩人であったジョン・ニュートン (John Newton, 1725-1807) にも、特筆すべき回心体験があり、それが讃美歌「アメイジング・グレイス」の原点となった。

15世紀から19世紀にかけて、イギリス、ヨーロッパ、アフリカ、西インド諸島、アメリカのあいだで、大がかりな奴隷貿易が行われていた。1725年、ロンドンの非国教徒の家に生まれたニュートンは、11歳のとき父について船乗りとなるが、やがて黒人奴隷を輸送するいわゆる「奴隷貿易商人」として巨万の富を築いた。

神を冒瀆することの多かったニュートンに突然、転機が訪れたのは、1748年3月10日、ニュートン23歳の時のことである。乗船していたグレイハウンド号が嵐に遭い、非常に危険な状態に陥った。それまで聖書がないがしろにし放蕩の限りを尽くしていたニュートンは、神に祈った——「わたしは神の手を見たと思った。わたしは祈り始めた」と、その時のことを振り返ってニュートンは、数ヶ月後の『日記』(Diary, 1751-56)に記

している¹。船は奇跡的にも嵐を脱し、難を逃れた。以来、3月10日をニュートンは第二の誕生日と心に決めた。

この劇的な回心体験は、ニュートンの心に深く刻まれた。体験から15年後の1764年、38歳の時、オウルニイの牧師となったニュートンは、自伝『*****の人生におこった幾つかの顕著で興味深い個別的出来事に関する真実の物語』(*An Authentic Narrative of Some Remarkable and Interesting Particulars in the Life of ******)を出版²。その第7書簡の中に、回心体験が詳しく記されている。

『真実の物語』の出版からさらに16年後、回心体験からはなんと31年後の1779年、54歳のとき、ニュートンの最高傑作のひとつ讚美歌「アメイジング・グレイス」が誕生した。「アメイジング・グレイス」には、先の回心体験が色濃く反映されると同時に、奴隷貿易商船の船長として、奴隷の売買に関わったことに対するニュートンの深い悔恨と、それにも関わらず赦しを与えてくれた神の愛に対する感謝が込められている。「アメイジング・グレイス」は、クーパーとの共作『オウルニイ讚美歌集』(*Olney Hymns*, 1779)に収められた全6連からなる讚美歌である。原題は「信仰を振り返ることと期待」(“Faith’s Review and Expectation”)。“review”には、再吟味とか査閲という意味がある。つまり、ニュートンが自らの信仰を顧み深く反省した、そのことがこの讚美歌を生む契機となった。

ニュートンの讚美歌は、非国教徒のアイザック・ウォッツ (Isaac Watts, 1674-1748) やメソジストのチャールズ・ウェズリー (Charles Wesley,

1 D. Bruce Hindmarsh, *John Newton and the English Evangelical Tradition* (1996; Cambridge: William B. Eerdmans, 2001) 57.

2 John Newton, *An Authentic Narrative of Some Remarkable and Interesting Particulars in the Life of ******. *Communicated in a Series of Letters to the Reverend Mr. Haweis*. London: J. Johnson, 1767.

1707-88) らの影響を強く受けている。わたしは、讃美歌を文学作品のひとつのジャンルとして考察したいと思う。讃美歌研究は、その時代の文学的伝統と切り離してはならないというジェネット・トッド (Janet Todd) らの意見は、傾聴に値するだろう³。

「アメイジング・グレイス」の第1連を引用する。

1. Amázing gráce ! (how swéet the sóund)

That sáv'd a wrétch like mé !

I ónce was lóst, but nów am fóund,

Was blínd, but now I sée.

アメイジング・グレイス！（なんと甘美な響き）

道ならぬわたしを救って下さった！

かつて迷えし者が、今見出され、

闇を見ていた者は、今光の中にいる。

詩型は、讃美歌の中でも最も一般的なコモン・ミーターであり、アクセント記号が示すように、各連が、弱強4歩脚で8音節と6音節の行が交互に配される4行からなる。押韻も、1行目と3行目“sound”, “found”, 2行目と4行目“me”, “see”がほぼ規則正しく韻を踏んでいる。「迷えし者が、今見出され」(I ónce was lóst but nów am fóund) という表現は素晴らしい。“Lost” (迷子になる) と “Found” (見つかる) という二項対立は、ギリシャ・

3 Madeleine Forell Marshall and Janet Todd, *English Congregational Hymns in the Eighteenth Century* (Lexington: UP of Kentucky, 1982) 1-27.

ローマ神話, イギリスの民話(フォークロア)さらにマザー・グース(「シー・ソーの唄」)のような伝承童謡などにも頻出する表現であり, 人類の諸文化に共通した普遍的な型である。「迷子になる」とは神への信仰を失ったことを, 「見つかる」とは信仰に目覚めたことを意味する。興味深いことに, 回心体験以前のニュートンは、『日記』のなかで自らを「迷子になった」(“get lost”) としばしば表現し, 回心以後は, 今度は自らを「見出された」(“was found”) と書いている。また, “sav’d a wretch like me!” の “saved” は, 使徒行伝やローマ人への手紙等に共通する隠喩であり, とくに海の危険を知り尽くしたニュートンは, おそらくこの “saved” に奇妙な身体性を付与したのである。

第3連は, 「いままで幾多の危険と労苦と誘惑を, /わたしは乗り越えてきた。/ここまで無事にこれたのも, 神の恵み, /神の恵みはわたしを故郷に導いてくださるだろう」とある。ニュートンは, 数多くの海の危険を乗り越え港(「ふるさと」)にたどり着いた。この第3連のニュートンは, 船乗りとしての経験をもとに書いており, ニュートンの他の作品にも頻出する海のイメージに, 一種独特の権威を与えているように思える。海と船と嵐のイメージは, 文字通りでもあり比喩的でもある。ニュートンのイメージは, チャールズ・ウヰズリーのそれに似てとても力強い。その理由は, おそらく, それらのイメージがすべて, 船乗りとしてのニュートンの肉体的/身体的経験に基づくものだからだろう。ニュートンは, 伝統的隠喩を実際に体験することで, いわば非日常化する。これがニュートン讚美歌の特徴である。最終第6連は, 「大地はやがて雪のように溶け/太陽は輝くことをやめるだろう, /しかしここいるわたしを召された神は, /永久にわたしのものだ」とある。最終連は, 「大地」という言葉で始まり, それを弧を描きながら最後の言葉「わたし」に着地し, 集会で聞く/歌う人に

讚美歌「アメイジング・グレイス」と奴隷貿易

安心感を与える。「わたしのものだ」(“mine”)という言葉には、ニュートンの恥も外聞もないまでの、「自我/自己」主張が見える。

確かに福音主義的キリスト教の説教師としてのニュートンは、絶えず「自己/わたし」を証することに集中しているかに見える。しかし彼の讚美歌は、彼自身についてうたうとき、生まれ変わる事のない罪深い年月をうたうとき、そしてそれらをことごとく変容してしまった「驚くべき神の恩寵＝アメイジング・グレイス」をうたうとき、もっとも生き生きとする。そのときニュートンの「透明な」言葉は、個人的あるいは自己中心的歪みを消し、ある種強烈な宗教体験を表象するものとなる。こうして、「アメイジング・グレイス」において、「わたし」は個人的かつ普遍的な「わたし」となるのである。

「個」と「普遍」のダイナミックな相関関係は、プラトンやアリストテレス以来、18世紀においても、哲学や芸術理論と実践における切迫した問題であった。その見事な実例が、ニュートンの讚美歌に見ることが出来るのである。